

あゆみ  
三入のつを月  
水へ  
まふ  
之水

類題發句集夏部

四月

蝶夢編

更衣

春の装とよまひくふ衣え  
塩釜の表紙を日くまもく  
名同哉とあはれきる阿の文衣  
あひも味持さやうまもく  
更衣そふり常哉解よき  
あふとく真紙は袋持しけり  
衣のまき似持のそとさけり

糸貫  
嵐雪  
露沾  
支考  
嵐葉  
調表  
江下月下

孫めを

衣之入涼しき物あるを念て  
一松子ぬき、歌ありきも之  
是づく、這子きくより更衣  
起くの分あさ軒一衣之  
月こぬたや赤の字のちりあり  
孫めをやは是て夜宿の思ひ  
てしく、空屋一志あり 松り丸  
旅者くいきとありとちあり  
一とあり 松り丸の歌や思未費  
人出たふ宿志の松や衣之

松後 雲松  
百里  
宗瑞  
彦元  
木因  
千代  
涼菴  
其角  
許六  
夏一

松

書巻

松出と花さへ芥子の一き物  
飲食のきひひよきうの松り  
己位六位色あまふもを馬巻  
空廻り嬉けや初人着す丸  
世の道にひもあひし青葉  
ふりくひもよ物立ぬき丸  
君代やほくふ系も端ひ丸  
あひひまかひやてり牛の角  
酔歌よりあひま海を白ひ丸  
并か名海陸ま丸と葵丸

来山  
吾仲  
丸雲  
系葉  
空松  
老士  
越人  
言水  
去来  
乙由

丸摩祭  
葵祭

日吉系  
千園子  
灌佛

日吉系 夏後やせうる太子記  
その外は桜の實あり千園子  
灌佛や授子さ乳もさの兒  
灌佛や目出交中しに寺系  
灌佛や躰弱さふさ井戸の巻  
灌佛の日やつわくは法ふ仙と  
灌佛や我死とちく子取婆  
灌佛子多佛も赤文つし  
灌佛や母に生れ死にた乳  
灌佛や乳もあふも比丘尼寺

洲春  
文素  
其用  
支考  
曲琴  
荷子  
毛統  
浪化  
助雪  
乙由

夏二

花市堂  
卒の躰弱  
夏花  
夏書  
夏歌

花市堂 花市も小僧の乳強の内通あり  
卒の躰弱 かくれ家よのくも卒のつし  
夏花 ちもあへし百日のち敷日と  
夏書 昔へとも故我あまの夏而日  
夏歌 志つともゆき系扱し、躰の系  
花市堂 夏は摘く片枝葉の乳も揺れ  
卒の躰弱 大のふちり一葉ち敷とて夏  
夏歌 そお中に登森へ入る夏歌

治天  
馬海  
乙由  
聖波  
支考  
千那  
如行  
山川  
葉里  
梅此

煮酒 新茶

酒煮のや秋衣をる木のくさし門  
昇舟と擧まぬ次への勢系が

久風 支考

古茶

祖又祖母のおくも世中て勢系が

文下

風炸

此ぬいく古茶加ふ出たや壺の石

田札

麦秋

その道より行高れまら風炸の灰

岩翁

疵瘡まら兒も刃くら麦秋秋

浪化

高く老ら乳勢系く麥の梅

許六

麦束又や七もくも世中て勢系が

伊勢 非詠 木尊 黒姜

後三

卯の忌腐 青嵐

麦秋や立向も夜くたふは、  
麥餅やけりく川もと此を介  
麦もちや夕の残まゆく年の氣  
吉野の虎の角くくの忌くく川

素人 折風 蝶麦 百川

長島の雲ゆ文出を吉野川

煮書

吉野さく海さけや苗衣花

嵐雪

雨あらし松の白ひや青あけり

支浪

卯の忌に色あふ川さぬ吉野川

支志

短夜

葉の秋や赤ら糸 月多知

表二 家因

夜のつらみの海にさへ夜の秋もが  
み、夜やうらみ方の秋のつらみ  
夏の秋や崩れもくひり冷し物  
夜に夜冬山名れ首のよきり  
こゝろ夜や増さくもくひり氣ら  
短夜やたしと糸の指長を  
ゆやんま音のつらみと音も  
短夜や夏のあふもゆきも  
み、秋や止んとして八柱の音  
短夜や階子と眠る禿も

生花  
北枝  
色蕉  
言水  
氷花  
方山  
片木  
己美  
既白  
鯉風  
長四

芋植  
物のり  
青さ  
花の花

芋植くも月おのふ月又か  
つらみ磯の白ひやゆらゆら  
書けりやまりもの種もあつた  
石のもをたかひり花の花  
花井つたけまきり花若花  
こがくも花も石も花のふ  
花を花にゆきもひり牡丹  
花畑も花も花も牡丹  
つらみの対人に花も白ひり  
花も花も花も牡丹

牡丹

星露  
利牛  
色蕉  
花露  
希因  
花葉  
智月  
秋風  
李白  
徐寅

芍薬

はあつり是ハと抑ふ海へん乳  
まらう子ハ益蓋へん牡丹  
兼おのほるおまらぬらん  
月蝕の露はあつり白牡丹  
淡火ハ漏して凡を散牡丹  
不入也小きく又ある海へん  
そまら小信の掬くらん  
芍薬や海へんの下にまらん  
芍薬や錦と牡丹の川と  
芍薬より世日の秋へあつり

専吟  
支考  
風弦  
木導  
雲程  
湖同  
建洞  
料蛙  
般松  
巴静

花葵

杜若

あつり嘆てとらりあつり  
せりとして蒼哉あつり葵へん  
花葵一の十やあつり  
たんくは累ハ日教あつり  
西の白やつ掬てりあつり  
足跡の踏まあるやあつり  
あつり花葵のあつり杜若  
あつりあつりあつりあつり  
杜若あつり水あつりあつり  
あつりあつりあつり杜若

方磨  
凡兆  
若者  
可風  
信徳  
泊位  
本来  
芭蕉  
左角  
菅氏

玉老芭蕉  
玉老芭蕉

傘にすた通りりかたのり  
葉ハまこと立葉も及ん杜若  
ゆんをと指くおろをの死つ  
まのましく水滸り杜若  
す物と花のふくむがまつ  
蓮まに是非と指くおろを  
湯のぬくぬくはくも加賀の  
袋の雨もゆりてやうまのり  
青空やとせ城のまを移るけ  
聖徳くや死もまはるま草葉

本導  
白雲  
伊勢 賀枝  
宇多 林  
治  
依  
文志  
和吟  
之伴

夏六

一八  
茨の花

一八や血より姉者ひく西  
一八やまゆも九幸の花の教  
ふくくく人まはるる新  
袖けく子女の泣や花の  
針ありと蝶よまはるる葉  
さうらのあくと茨花まきり  
社まはく比丘尼のうら花  
つゆやのまはるる葉のま  
有とまはるる二本はりけり花  
吹けりも死の川ま子の方せ

季覽  
涼菟  
長紅  
伊勢 乙明  
乙由  
何在  
乙筑  
支考  
智月  
酒堂

嬰葉



押合ぬ笑ふちりきり女子の心  
 春くまら白きけりけり花  
 雷のひききにちりけり花  
 ちりてあふれ女子の一平し  
 けりちりけりけりけり花  
 春髪の日れぬきき女子の心  
 きりけりけりけりけり花  
 けりけりけりけりけり花  
 又牡丹母菊菊けりけり花  
 けりけりけりけりけり花

舎飛  
 嵐葉  
 蕉笠  
 落梧  
 礎柱  
 木骨  
 卓袋  
 林取  
 陸夜  
 意程

夏七

風車

岩波

蹴花

柔梳草

卯の花

牡丹さくら負糸軽し女子の心  
 余のふりけりけりけり花  
 蝶も夏髪さくらけり花  
 岩波や浪さくらけり花  
 蹴花の道敷へさくら蹴り花  
 公たさくらけりけり花  
 くのさくらけりけり花  
 卯の花さくらけりけり花  
 卯の花さくらけりけり花  
 くのさくらけりけり花

有琴  
 希因  
 巴文  
 一番  
 乙由  
 兎頭  
 芭蕉  
 之角  
 赤治  
 楓林

言の花  
若楓

う花の葉を葉よちる垣けが  
卯の花の葉万々ん雪の川  
外向うの葉かこもわお木垣  
ふのうれやちらひやん夜ゆん  
卯のふやつかこもあつ枝のあり  
さうたふにのこあふはく言乃ふ  
こ楓葉色よあふも一さう紫  
子知ゆのま歌りわ可る楓  
君まきのまあひの初や若楓  
かひひら秋あつら成あつらふ

昌房 冬来 曲膝 伊賀 万平 風菱 蝶菱 曲翠 支考 深菟 嵐雪

若葉

余の葉をら葉まも青し若楓  
大定も乃くま若葉の葉ゆ  
お葉あつまらしとあふら  
るも水またらく若葉也極の先  
一葉つて樹の園はあつら葉が  
おれとあまひもさあれ若葉  
つて葉の葉の葉の葉の葉の葉  
はなまも同の葉ふ谷も若葉が  
終のまもあつらふも若葉が  
山越若葉の葉さく若葉が

可風 北枝 惟花 外高 沾荷 山崎 呂丸 若吟 尾張 秋水 蓮之

若葉の姿

満ちゆくハ蝶のまて刀つあ葉が  
 叶のあわく刀つあ花の若葉が  
 まて花の西行のまて刀つあ葉が  
 葉梅や寺中の入のあわくま  
 とあわくや梅のまて刀つあ葉が  
 葉梅や花のあわくまて刀つあ葉が  
 花とて風はあわくまて刀つあ葉が  
 葉梅やてハ花のあわくまて刀つあ葉が  
 葉木立中に葉のまて刀つあ葉が  
 葉このまて刀つあ葉が

松雀

富岡

淇水

希因

琴吹

櫻被

若足

一路

葉木

世歌

葉梅

櫻の實

葉木立

木下園

梅の葉が異ひりのまて刀つあ葉が  
 葉木立まて刀つあ葉が  
 葉のまて刀つあ葉が  
 葉のまて刀つあ葉が  
 葉のまて刀つあ葉が  
 葉のまて刀つあ葉が  
 葉のまて刀つあ葉が  
 葉のまて刀つあ葉が  
 葉のまて刀つあ葉が  
 葉のまて刀つあ葉が

先賢

安枝

希因

常河

茂電

除風

子春

白丸

玄芳

文章

木下園

夏跡

橘の葉のあつては栗の葉のあつては  
茂る木やあつてはさうさへはの葉  
光りあふあつては山のさきりり  
夏草や捨棄すてて川通り  
順礼の梅さうりり夏跡は  
秣有ふへ枝枝折の夏跡は  
啼きあれ虫のあつては夏跡は  
遠の路志のつたなつては  
雲を衣に我そのまゝ夏跡は  
夏跡はさうりり相の葉

相の花

夏山

如行  
猿維  
公未  
其角  
帯衣  
芭蕉  
一笑  
野水  
怒風  
牛角

花柚

相の花托せあつては尾長香  
杜松針の座もふれ白ひは  
二葉固あつては枝の白ひは  
白ひはさうりりあつては  
裏つては垣乃及つては美人  
白ひはさうりり青山椒や  
白ひはさうりり枝と動や  
小の鞠や垣のあつては  
垣乃及つては鼻つては  
さうりりあつては四角はさうりり花

美人草

青山椒

小の鞠

垣乃及

白丁花

巴靜  
車馬  
岩海  
李吟  
其瀧  
乙由  
壹中  
曾北  
一玲

鷹爪

藜藿

校桐の花

竹の子

何の葉茂借くか先んまらぬ  
藪つもたひ多岸の如く葉が  
何乃早下りしをさけと藜藿  
己の葉は掃きくちる校桐の花  
蛇の葉は舌より毒くさるるの  
女は子や大うこやうまうま  
竹の子や父の毒くまの如く  
たきのとや種ましの強き  
省やひきうにあり垣の上  
竹の子やうけくひくも傘

乙由  
芭蕉  
孤食  
其器  
里朝  
芭蕉  
大芳  
木導

篠の子

木繁木葉

竹の子や熱風度ハそら  
筆や何おもくぬき礎を  
たげの子や伸らうてハ款を  
竹の子やゆめ多そ蛇爪つま  
筆やまもあれ未だのそと  
さくの子や独りしと根も記  
清浄やはよちら志を松葉  
雪のふいらそく竹の葉も

藤守  
支考  
桐夕  
太来  
末山  
以之  
千梅  
倚老  
芭蕉  
支考

岩梨

落

葵

蓮の浮葉

郭云

松の葉集まるとは光りぬ  
岩がや山の道なきは  
朝もた岩岩梨が猿は  
夜もまかしの葉集まるとは  
葵の葉不使りやま  
蓮の葉の甘味の中は  
蓮の葉乃深き志なき  
岩の葉は子あけは  
そは深くや耳も  
有明の池そのま

後川  
山  
任口  
千那  
智北  
戸  
黄山  
系  
明水  
荷子  
守武  
望一  
家周

海はあはれや  
深き池は  
郭云大休  
おとま  
木から  
村  
中  
乞  
深  
川

芭蕉  
来山  
曹良  
夫  
嵐雪

杜鵑啼くや西村の十の月  
春の末頃なふあけの三声  
時をきかぬにかなうてははれ  
その癖はあまふりぬ子規  
捉獲のたふ論かし本ははれ  
郭公泣のま川にふりぬ  
杜鵑もくわ日信を名を所  
りしはあはれなまはれはれ  
都公のふりぬはあまの時  
川夢も一羽くのわはれ

大正  
尚公  
我馬  
松風  
重石  
木岡  
舟丸  
文林  
助安

院亦や喧嘩は清く郭公  
本も起す一針を立にいら  
深ゆゑあはれなまはれはれ  
子規あはれやちとて鏡山  
似て如哉よれくはれや子規  
子も踏ん枕もゆきぬはれ  
啼にまはれはれはれ郭公  
あはれなまはれはれはれ  
筆を名あはれはれはれ子規  
郭公はれはれはれはれ

立志  
芳樹  
高川  
支考  
旬堂  
其角  
すて  
浪化  
朱松  
地坡

此詩のひびくの中や子規  
あつたはるあり音の村を  
おとすはる無の昔もあはれ  
やの男は早もく形も整ふ  
三知月をささふあはれは  
蜀黍たたくや木の乃れ角櫓  
海はたす月夜馬の波や先  
一知て安んずるは都云  
使まきくハ二階の春はう時を  
深きよは林多山のう海より

羽衣 舎飛 丹七 初月 教石 史邦 望東 万子 松蔭 時寺

夢

中々おは夜明けのまに  
深きよは林多山のう海より  
あはれは 蜀黍たたくや木の乃れ角櫓  
海はたす月夜馬の波や先  
一知て安んずるは都云  
使まきくハ二階の春はう時を  
深きよは林多山のう海より

乙由 唐元 免士 吉山 古芳 松蔭 松蔭 支考 玄武

老翁

老翁のあはれは  
あはれは 蜀黍たたくや木の乃れ角櫓  
海はたす月夜馬の波や先  
一知て安んずるは都云  
使まきくハ二階の春はう時を  
深きよは林多山のう海より

玄武



凍散鳥

雪や電うらむ鳥の巻と事  
る我を淋うもかたなる  
やうくと出く啼と布敷  
しる敷文おむる家やうん多  
啼はまじり啼ぬハ淋凍散鳥  
決絶の藝吉の泣やかたなる  
植捨一山田冬書しかきなる  
かたなる我とまじりて  
かたなる人あつりり凍散鳥  
留さけとせひきりてんた鳥

此行  
色蕉  
文州  
猿雉  
靴界  
冰花  
舟林  
乙由  
赤若  
都不覺

ゆいまゝ書く哉啼やかたなる  
啼とあつりりかたなる凍散鳥  
何方向く飛つゆりんをぬ布敷  
かたなる舟あつりりかたなる  
是のうらむ書くもかたなる凍散鳥  
凍散鳥もあつりりかたなる  
あつりり何と都と春ハきり  
啼とあつりりかたなる  
中くはあつりりかたなる  
夜啼も何人あつりり鳴鳩

希因  
麻父  
何聲  
鳥醉  
己筑  
玄武  
雨林  
猿爰  
采更  
卷阿

方目  
葎系雀

舊樹入  
青鸞  
編輯

啼立く鶯も羽も夜の舟  
葎の種乃ちくもてせにひこ  
ひこ子啼や鶯の言もあは  
おみあもかひして夜よひこ  
いさうひも川向ひなりひこ  
いさうひも夜覺てはも昼の鳥  
樹をわすれ山の愛れ常しく  
青鸞や代うくひよかいひ  
青さたりや世乃ちなり子苗  
編輯よ教うればかき捨てん

陸三  
九次  
高川  
寺子  
北而  
鳥朝  
巴靜  
准鴉  
正秀  
柳蔭

乙蚕

浮秘奈

蚕取

垣堀出

編輯より子りやとくし仲業  
かひあやや詩つく社説あは  
編輯や花より種もぬ瓜あは  
のいほうや故書り故あはま立水  
乙蚕ももてはよのりて戦をり  
麦まゝの家くやうん土鴨  
お蝶や宵中をんもてあは  
と川蝶や梅雨の晴りあは  
被ひやまもる糸の端入り  
垣堀出や通りの絶くまゝ中

北枝  
星推  
吐月  
其南  
智月  
杜若  
孟遠  
浮流  
南畝

協の子

蠅取協

子子

飛蟻

蟻

協の子や蟻の足より此蟻の  
協の子や糸引習ふ跡若松  
子や蟻取蟻の牙はるひ  
ほりゆりや水のり糸のつくま  
ほりゆりやむしは蟻水より  
枯もろし蟻身へは相蟻が  
やろくは虫より引ま科蟻乳  
這書とこひや下の蟻の死  
井中事たまひくある蟻  
飛のいそあふ糸散やひまへる

妻波 朝休 史邦 気雲 蟻取 芋魁 素法 芭蕉 曲聚 芦本

蚊

蚊帳

月代をきき支立より蚊の物  
蚊のひし月本知る背の黒らり  
蚊のあや行ゆるふしほ夏口  
山道の蚊多登中に食ひり  
夏庭の蚊の去いさひ飛走が  
血蚊より身より思後蚊の憎き  
おのろし傘のよりよき蚊の乳  
蚊のあや食も先き蚊の乳  
やろくは涼く少し蚊帳より

台藤 猿稚 雪芝 去来 芭蕉 丈草 二水 可電 不玉

生襖

約そ先く紋巻の白ひわ二三日  
洞下へふ重の勢いや紋巻加  
約初く紋巻替りる五月夜は  
後倉我生さかろん初月か  
小倉にふゆれぬりのを饅くら  
大勢の中へ一本か何ふくぬ  
川を敷敷我遊きぬ初月か  
地裁さく敷敷とひまけく饅巻  
飯すくや子の廣葉の折るへり  
ゆよりぬまきぬすぬか一夜飯

歌

浪化 言水 芭蕉 風吟 嵐亭 泥足 雲巻 木田 泉次

麻の袋角

凄うらぬ石の枕や一夜きし  
あぢぬぬ折ひの麻の袋角  
神けく折きく嵐巻袋つ  
牛の子よろへん麻の袋くろ角

宗陽 伊賀 道之

五月

高瀬

七ころ尾の長巻くは高瀬あぶ  
あつしぬ袖とあわ先の白ひが  
巻招きよと巻ひて青く高瀬ぬ  
内裏へも巻きよく入る高瀬あぶ

嵐亭 秋巻 撫雲

蓬少  
高蒲酒

洞春戸極よをまらぬめり  
川死の蒲葎吹きり定の所  
我若やはか殺とくぬあや先  
あや若くぞぬ日知の目利と  
美強り高蒲やおの朝の毒  
切り比の水の川あや先  
泥足の赤くかちくや高蒲  
何やの少く朝や却春多の危  
著て於蓬生の高と来にり

笠下  
曲翠  
涼菟  
小春  
介我  
乙由  
依後  
楚撲  
強行  
腰山

高蒲酒

高蒲刀

高玉

高地

高

殊物を沼よ割とる高蒲酒  
朝湯うく候味も高蒲酒  
さくぬ酒よ金と蚊のい双虫のい  
一刀刀者入高蒲酒丸節  
高玉の代のためには高蒲酒丸節  
高玉や焼の荒高蒲酒丸節  
高玉や髪髪の高玉高蒲酒丸節  
高玉高蒲酒丸節  
高玉高蒲酒丸節  
高玉高蒲酒丸節  
高玉高蒲酒丸節

言水  
右花  
見推  
言水  
班象  
相道  
嵐雲  
岩舟

機

彈丸まゝ女子の習ふ程くれ  
而かゝる程の中に嘆かき  
此の日の仕中にそく程の程  
踏ひきして女子は扱ひたる  
見下せたる者葉まある所機乳  
雲風と吹くそく程の程  
太字の書あり風の書あり  
機見れば女子本通まで  
のそくはそく地を踏くそく

越葉  
吐葉  
け抱  
採志  
支考  
吾仲  
松尾  
松尾

刺雲の境

葉子摘

加茂競馬

競馬三掛

外醉日

定数の破乳と並ぶ如法の利り  
きふの境強弱とあそぶ世に  
かきうにも後きんをぬ甲うれ  
而子やん志く女身名も忘れ  
競る足くりやうと疎の味う那  
毛の危やうの競り刃定に  
七條の外衣葉まらうにそく  
あそぶそくそくに用いれや足掛  
踏ひきも外掛る日と義と笠  
外掛るそくそく葉まらうに借ん

孟遠  
披長  
子恩  
葉子  
朱連  
冰花  
絆六  
嵐三  
芭蕉  
以之

五月雨

五月雨の後の花きく  
 さやしのや蚕のつゆ葉の  
 信のつれや色紙のつゆ葉の  
 五月雨や紙の字をよめく  
 日とみえたるく異し五月雨  
 五月雨は何れも多きと流の  
 湖の底も水はたき五月雨  
 多きくは三月月相を五月  
 五月雨は雨に計る小人取  
 けあふ多小粒のつゆあま

信位  
 芭蕉  
 常牧  
 敦石  
 去来  
 其雨  
 尚白

五月雨にさあつた物多味  
 信のつれや色紙のつゆ葉の  
 五月雨や植田の中よかいつ  
 たしあまき 鏡の川の水を  
 さよとれやを将鳥のつゆ  
 五月雨は雨に計る小人取  
 けあふ多小粒のつゆあま

山崎  
 孝佐  
 如行  
 依是  
 浦橋  
 支考  
 龜洞  
 芦春  
 後古  
 松崎  
 木暮

梅雨

梅雨

こころもや後へうけらる木枯  
度へまはせぬとて白く五月  
五月雨や山を暮らす夜はぬ  
冬へのやうくやうくこころ  
夕立のかゝらぬ梅雨は  
妻の面もやあはれうて飽か  
ふ嬉しやまくとおは梅雨の  
花の葉にまある故やついで  
川原より狐火のやほら晴  
梅雨の後牛の里に堤の乳

志毫  
春丸  
老士  
梅珠  
大子  
不ノ  
不玉  
酒屋  
史邦  
延年

己月周

虎洞雨

夏の月

たのしく春に下結く己月  
まよふ麻衣を毛む己月や  
細くちやまひわたり五月周  
梅の落る言れまうこころ  
けあたらわたりまよとる周  
さしはら虎洞の雨うく  
隙との中にまよとる雨  
つらねあつちまへり虎の  
夏の月清くゆるぎ赤坂や  
市井も梅の白く夏月

梅志  
楚舟  
香花  
梅菱  
李夕  
去芳  
一知  
残馬  
色蕉  
凡兆



花久し  
去蘇州  
藻の花

破鏡のひ、朝も曇り、夜の月  
子ノ戸や暑き日取久し  
夜中か秋のそとく、夏あそ  
川向ひよつとく、居るは冷夏の日  
ゆふやまけき、おひらう花久し  
去蘇州改む、快き水亦  
藻の花よやけり、すれは約の糸  
つらうけく、藻の糸眼くはれ  
藻の糸は、うらみの糸の變り、那  
もの花やか、いづくも、藻の中

北枝 <sup>伊勢</sup>  
我峯 <sup>伊勢</sup>  
巴靜 <sup>伊勢</sup>  
櫻良 <sup>陸奥</sup>  
等彩 <sup>伊勢</sup>  
那牛 <sup>伊勢</sup>  
北枝  
凡兆 <sup>元法</sup>  
胡友 <sup>紀伊</sup>  
瓦後

藻川舟

藻の花

中に子も、鹽よれせう、藻川舟  
そとりの月哉、うらも、藻川舟  
一あり、比良のうらや、もからぬ  
うらも、侍の尺の、おとけ  
藻や、けき、うらも、の者、うら  
うらも、あや、あや、いそ、おとけ  
うらも、あや、あや、いそ、おとけ  
うらも、あや、あや、いそ、おとけ  
うらも、あや、あや、いそ、おとけ  
うらも、あや、あや、いそ、おとけ

後吾  
敬家  
氷花  
嵐雪  
乙由 <sup>加賀</sup>  
若梅 <sup>大和</sup>  
千代 <sup>越前</sup>  
雨衣  
糸代  
山季

土產草  
百合

くじ草や次舟りゆく所り候  
清つまの宮よひくや時申事  
百合の心たのめり候  
お花中に火や焼きぬ百合の心  
唯しやとらう下敷船の系  
鷲を名撲り取くや百合の花  
多むらや百合を中く百合の款  
とくしや加ふら外りや百合の心  
花の心や教と小舟の心花の心  
紫陽花や花黄と志う花の心

花の心

沈牛  
花曉  
支房  
素走  
西秀  
半残  
夢周  
芭蕉  
巴靜

花の心

あまきわの徒もぬ克と嘆直し  
紫陽花は下りぬや花の心  
紫陽花や花黄と志う花の心  
眉掃成西影しと花の心  
よやと志うふやと花の心  
勝の心と花の心  
川来り流るれぬ心  
くは花の心と花の心  
萱草の花や花黄と志う花の心  
志うと花の心と花の心

花の心

花の心

芭丈  
芭九  
冥一  
芭蕉  
其若  
他若不知  
来山  
涼菴  
青荷

石菖蒲

石菖り月の影りや新巻下

猿稚

花菖蒲

石菖や若く川原の池の中

既白

金銀花

紫羅蘭の中は清き花をさし

八柔

金仙花

忍冬の高枝もそよ金銀花

乙由

空豆の总

空豆の总咲りり麦の穂

孤至

粟の實

粟の實よりつるはる娘くれ

一匹

蓼葉

蓼葉や空ましくも乾麦の穂

希用

朝露草

朝露草や露もつるはる娘くれ

伯葉

夜露草

夜露草や露もつるはる娘くれ

光哉

さしきや牡丹の傍の葉のそよ

光哉

朝露草

夏草如きつるはる娘くれ

乙由

夜露草

いよこ取手よ枝の影や草の上

杜若

くらがりには夜露草の影りり草の枝

史邦

鏡花池也一は夜露草の影り

木卯

那若草も好味つるはるの影り

名山

花の影かきこもるの影り

荷弓

うきはもや思かきまじり花の隅

秋萩

子松茸二月の瓜も物あはれ

秋尾

我もこれ藜の枝り草にまじり

将光

藜

早松茸

早松茸

蔓 茄子

厥りり其の子枝くれまへり  
くれまへり其の子枝くれまへり  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝

伊珊 乙河 舟母 我志

于瓜 如瓜 南天冠 栗衣冠

裁瓜の土れ心と葉陰うれ  
于瓜わく川あけてる瓜  
如瓜わく川あけてる瓜  
南天冠の葉陰うれ  
栗衣冠の葉陰うれ  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝

伊珊 乙河 舟母 我志

杜鵑花

杜鵑花の葉陰うれ  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝  
其の子枝くれまへり其の子枝

伊珊 乙河 舟母 我志

合款花

去うぬ妻哉嘆く如く神子の心  
や、夜を木にそぐ、神木花  
合款さくや馬もつるくも躍り

哉中 行  
駿河 馬老  
か敷 三四

未楊柳

さへ山やみすくも光ぬ生らる

北観

花栢櫛

己ら雨よりぬくも流るる花さくも

糸 飛坡  
尾張 蟻水

第木

第木に女双帯の杖を名を  
そくはる詠るもよきにけり

蕨交

花楸

たを花や定家机のありは

秋風

標

標やは建てるに社家の名を以  
たを花や志の神あり白ひ鳥  
やんらと何あちや志の志を  
いへ木の逆ひ川を志の志を  
いなり伊勢の志ありと嘆にけり

伊勢 子珊  
か坂 禹洗  
芭蕉  
志雪  
浮石

山梔子

青梅や柔らる平代息やよめ

万子

青梅

青梅哉山や女子の塗木履  
青起先や杖あり枝哉信然

伊丹 木導  
采仲

梅溪

交り枝葉の種のはる小梅乳  
妻あやむや瓜うさく日の面

伊藤 秋色  
望翠

杏 枇杷 若林

越川うゝの葉も流るゝ枇杷  
若林の竹もろちて根盡く  
如林や若林の葉もろちて  
若竹や若竹の出敷厚葉の葉  
根の破るゝその若林を如林根  
一枝もまけけ若竹の若竹  
若竹の若竹踏も枝も若  
如林や若竹の葉もろちて  
死にに若竹吹出た若竹

瓜流 凍菘 支考 曲琴 奈手 仙化 雲鈴 乙由 千代

若の度敷 田植

早乙女

死もあけ若の若の度敷  
渺くも若と若の田植  
糸之の若も若の田植  
田植も若の若の度敷  
若の若の念佛中田植  
若の若の若の田植  
一帯に若も若の田植  
若の若の若を若の田植  
若の若の若も若の田植  
早乙女も若の若の度敷

萩人 自悦 支考 雲行 更明 支考 玄輪 行六 乙由 来山

早苗

青田

子乙女や子の法方八柱くひ  
早乙女うむまんとやん笠の取  
汁端は笠の草や子苗取  
子乙女やなつやうは掛ひかり  
雨杉く昔早苗は子苗と  
子苗んく余の虫たんをり  
ふゆれおをりにくく早苗が  
南の色を子摘み先編と一ひが  
田仕中のゆきも法方子苗に  
一番と二番も草の青田う取

笠取  
周指  
其角  
涼老  
芭蕉  
木岡  
浪化  
落指  
李由  
曾北

田子取

涼さの帯取く田の青と  
素羽哉中に青田のそと取が  
草取のそと息つく青田は  
崎豆もともにくるふ青田は  
日の入る夕影我く青田は  
やけ縁を春中に曇く田子取  
雷れつうはしりや田子取  
草取の笠くくうや田の取は  
控の流かろく曇く田子取  
笠の取のやかくぬら二番草

涼老  
丈草  
笠道  
其角  
治乞  
其角  
柳妖  
字向  
可風  
蝶衣

豆植  
粟蒔  
虫

豆植くしひんかん升の中  
 粟蒔か鶴も乃くぬりまふ  
 虫見や船破く先未乳  
 登乃れそ海赤を登り船  
 舟ひ子の泣くつらむ葉が  
 つらむ此表試遠より登れ  
 曉を思はし帰る海より船  
 夜の更なほと大きぬ登りか  
 田の水鼓んせく雲のほろが  
 白れひと遠より見ぬ虫が

新大 露月  
 登元  
 花種  
 流水  
 涼莖  
 尚心  
 汝村  
 北枝  
 万平

挑灯の消くそしつれ登り乳  
 草こ木も登りきと水の音  
 奪あふく踏あやしく登り  
 すとりあり海赤く登り  
 水子の登りと見ぬく登り  
 刈草れり登り先登り乳  
 故き火の煙りそり登り  
 螢火や草におきゆ夜の方  
 けらひやまき登りぬ橋の表  
 夜ふゆく虫よ集りおくるが

正秀  
 己而  
 投重  
 探志  
 一盤  
 許六  
 怒風  
 若者  
 阿者



敬天

子よふ似る子のあはれおれら  
雲のふかきわくろくろく雲れ  
消て又何れりある雲う那  
故やう火のきこひくろく強後  
魚の青火のまきこく故きり  
一止り多標成まき不故遠り  
行隅へやうりもろくろく故きり  
姑のあふれきこくろくかろり  
のやう火のまきこくろく白ひ  
りてれよ病へく故故きり

富田 可磨 信 百里 孔洗 工所 方堅 蓮之 一葦 兆而

敬指

我亦やあま敬やりのひまに  
敬指をまきろくの刺り夕う那  
かろりらよ夏のうれ標かろり  
故指やほつれくろくあう月  
故ろらの際のくろく三日の  
あはれ死やまきろく春はまかろり  
去聖とれよ朝まかろり  
かろりら酒のまきろく遠きり  
陰まきろく冷やまきろく地牛  
地牛ろりあろくろくまきろり

耳考 常矩 其角 由之 牧寺 一朝 凍堯 之角 如行 冰花

敬年

純 徑

七、八の起のあやかすあり  
行路 北 秋至  
 露の象た義と見せりら純牛  
 考れども道教はらうらあり  
上飛 木呪  
 ひとてせ若ふかりんかそはを  
止弦  
 舟探り一布たう純牛  
去 乙峯  
 舟を角と見せりら純牛  
去 去髪  
 己るるよあやかすな先く  
 何中た壁ふ書てやあくを  
 事取の徑乃血うれく純牛は  
長龍二 為有 妻波 九北

牆垣生  
 控衣ぬ

鼓典

水鳥象

牆垣の子ふみもてらん風車  
 谷陰や一のむかきく純のきぬ  
 舟や約の子まより純乃衣  
 查もかくや流く雲の夜も雲  
 流くや水よのあか風情あり  
 鳩の象や雲もからの良休ぬ  
 波あえぬ雲のりてや冬これ也  
 雲の脊よたふふ鳩の象象  
 鷗れ象やひもさふ水のみ  
 かこの象の足へらあかかこれ  
 枕山  
 舟徑  
 南北  
丹後 望翠  
 三島  
 荊口  
 曾良  
 肅山  
 山  
 路通

鶉の巣  
水鶉

取上るそつや戻まや鶉の巣  
吹飛ねたたくてなま水鶉  
足喜れ万載たたくあ鶉  
木つたより月こけて鳴る水鶉  
笑ふもよおしはるくかぬ鶉  
雷鼓さつぬき半くあ鶉  
酒をそよびて帰る水鶉  
久十九秋同ぬあにまかか鶉  
枝折戸のかけこきぬあ鶉  
押きこいていぬる秋の秧鶉

松蔭  
水  
李下  
花去  
平人  
高川  
吾伴  
侍夜  
氷麦  
女素

翡翠

羽枝名

鶉川

たかまといやの夜を水鶉  
と鶉の水に鶉のまかくかぬ  
翡翠や鶉の上を叩いてあ鶉  
川をよわの書ささるぬつこ  
追とる枝ま志あくぬぬけ  
羽衣の書見と鶉のまかぬ  
帯しるしてやうて鶉のまかぬ  
鶉の頬より舞あひく志ぬ  
さつこをあまの目まきぬ  
首まき鶉のむら子ぬ

三河 守馬  
杜若  
高川  
信徳  
浪化  
希周  
芭蕉  
荷弓  
信徳  
浪化

鴉飼火や重の公と葦の虫  
 くの糸や結多川多の籠より  
 條けの敷移通の敷や終朗  
 十二羽のあれ中羽の移通より  
 うらひの我といはく松子より  
 宵のつらや月見歌あつ移通より  
 ちのいと立を髪とる川への編  
 うらひやせうらうらうと志く  
 石川や藻の川村老うの湯より  
 築寺や湯のあつ移通月僧の

北枝  
 如行  
 松蔭  
 本寺  
 栄友  
 可吟  
 己筑  
 以裁  
 伊賀 抱環  
 配刀

重繁お

鹿子  
 滝佛老日よせりあふ鹿子より  
 矢の下に母れ乳茂の野かたより  
 つましるもあつ移通の子れ角臥  
 嵐の子乃あや乳の敷や山留  
 猪より吹うらうらうと志く  
 弓杖小平心と敷の吹り乳  
 雲さたたや尾越の麻乃移通より  
 よれ麻のあつ移通火串れをあ系  
 海の編のあつ移通あつ移通  
 在の東城志はうらうら小縁葵

芭蕉  
 立志  
 云芳  
 松蔭  
 正秀  
 嵐雲  
 嵐休  
 班系  
 林凡  
 其角

照村  
 移通持  
 火串老  
 于編  
 小縁

帷子

辻ノ流

夏羽織

晒布

六月

かひの初あけぬのやあゆ美  
帷子や帯もさきぬは風も吹  
くまの影ひやなく影己白  
お格梗席子ゆきや辻ノ流  
かひに流るゝかお羽織  
吹度まき流るゝかお羽織  
つ出のあけぬのやあゆ美  
橋入老歌の赤きお出布

配刀  
杜若  
支考  
伊賀 此若  
木飲  
乙妙  
伊賀 深菘  
楚由

夏世五

氷室

氷解

一夜酒

祇園會

六月の蜜柑もききり氷室  
帷子お世帯へ出まらぬ  
散あんと流るゝかお氷室  
氷室おかひに流るゝか  
骨折とぬかぬと氷室  
今まきのまきかひに流るゝ  
あけと流るゝかお氷解  
まきのまきかひに流るゝ  
揮の志ぬ者あり一夜酒  
月餅や松系お入入佐山

言水  
伊賀 柳吹  
希周  
尾法 文素  
子礼  
嬰橋  
伊賀 那苑  
老夕  
知角  
治位

富士詣

月日は如兒の歌を名爲れ  
あけぬやふれ舟のつらきふ  
鷺もまそ引出しり函谷許  
瓜子の指くつまむねを嘉祥  
朝まきふぬのりよふ立らん  
半夏生や神菜のまゝの生  
形小岳の踏とくらくすま  
足赤れ古月の入る人あふ  
病む人共昔のやうに古用  
安んた、雲子清くく富士山

清良  
涼菘  
承  
雲龍  
許六  
方山  
許六  
也  
恭勇  
秋風  
故足  
風水

去用

半夏生

嘉祥

丹波船

富士垢離  
鞍馬休伐

水每月継  
御杖

川社

富士あややのうと雪のあふ川  
舟知りや枚の鬼乃ちり  
竹きりや雪れ夜ゆとのり  
里へ冬継くあふ御杖  
受とくやまあふれつ御杖川  
葎くくひ月のひくくや御杖  
念珠も帯にきりや御杖川  
川風より馬帽子かえて御杖  
松よに垂のくくく川御杖  
川や御杖の太極杖者

立圃  
麻父  
一窟  
勺空  
春波  
既忘  
白尾  
此若水

形代  
茅の痛  
鷹羽遺言  
腐草化虫  
暑

形代や男女老志うしけし  
子成つぬ茅の痛をうきぬ  
あつて日はまの鷹の羽をうれ  
枯草のほろりぬるはらぬが  
石も木も眼も光る阿つさる  
約置るぬれき海をうらふ舟  
日の園やあつぬ暑も牛の舌  
あつぬおわつくと夏の至所  
元山乃ちうら及ぬ阿つさる  
暑もいやはらうら戸の置は

櫻叟  
田向 田國  
雪松  
ト宅  
太来  
好春  
正秀  
尚志  
様雄

たつ暑し心疑ふし女髪のは  
小女の帯にくるまら暑うれ  
肩うら子もあ友あつと暑うれ  
二三書読むぬらとあつさる  
石系の踏むぬらぬ暑うれ  
相の糸も埃のほろり暑うれ  
二本目の扇をあつと暑うれ  
鶯も虫砂りまらぬあつさる  
てり暑うら十方ぬらぬ暑うれ  
暖風の歌もあつさる暑うれ

九草  
き角  
それ  
魯町  
秋風  
孤老  
嵐葉  
風園  
毛純  
波村

夏世

夕立

寝るるく枕さうへはき異る乳  
何づくと散れま川に署少  
勢留乳さうへは異る位居り  
あつた日やあいつ通る燈の杖  
こころかや休たえく居る署少  
何の署少や枕さうへは散れあつた  
ふ雨やひりくともむ名の家  
夕立に走り下るや休たえく  
白雨よ雲のく月やまれ上  
ふ雨のさうへは川に下散れえ

細石  
雲被  
後者  
老士  
玄駈  
錦妻  
李由  
丈草  
兎貴

夕立や波ひさうさう去か名を  
ふ雨や家散あつたあ勢勢  
あつたあや静かな川に日夕  
夕立よ強りかく雨のまらる  
ふ雨やちりりけし散れ休の度  
白雨り押さるあつたあえん  
ゆかしや蓮の葉たたく池の岸  
夕立の田畑りかゝる菜う乳  
夕立や川邊と表さうへは馬  
夕立や林の白い表さうへは

千角  
史邦  
枕邊  
暖鳥  
許六  
岩種  
正秀  
徐寅



雲の峯

夕立や此のすゝこの勢一死  
ふふや和歌う溜く一古の  
白濁よ家傳しるを食ひ  
夕立や尺の鯉の眼さ  
ふと川の橋子あつたは  
松やとちや入あつたは海の上  
ふふや和歌う流る月ま  
夕立や大休系をほし歌  
夕立や大休系をほし歌  
夕立や大休系をほし歌  
夕立や大休系をほし歌

俳句  
紫原  
芭蕉  
古芳  
千梅  
珈琲  
一和  
康工  
譜九  
周指

照りつけて夕立雲の崩き  
雨の峰あふんが丸の崩して  
雲の峯何も出たして消  
飛社より太鼓おろり雲の峰  
雲の峰何も出たして消  
都くらのがちんちん雲の峰  
ふふのやや芳根を中を根  
鞠はやあはれあはれ雲の峰  
舟入者福り笠や雲の峰  
夕立や和歌う流る月ま

猿稚  
免費  
方山  
北枝  
相雨  
歌者  
許六  
源亮  
古今  
太末

去用子

一ひり為死物未や去用子  
夜急或是て何んて及く去用子  
寝着くつゝ大光さん去用子  
去用子一屏風八事より置所  
坐はりや着然物さへも桜花  
去用子や大道七浦交系種店  
去用子や三子余是二河川  
去用子や蛙のテ物か人が屏  
去用子衣振種人さう去用子  
虫何やういふ人へ我をさ

許六 其角 玄来 狐伴 下枝 伴好 此若公 宗瑞 得牛 風律

長四十

扇

そと風の二匹鼓ひく扇は  
日南川行歌思ふ扇は種  
さる人の故刃射う扇は  
いあまは二本出りる河あ鼓は  
寝てはひろけく扇は種  
扇のたよりつふああ扇は  
扇はよ破ゆくの扇は種  
太長意りその扇は風をさ  
一ひりあひく扇は種  
色い糸は巻く扇は種

一象 一笑 尚白 周氏 猿紐 蓮之 許六 表立 寸長 乙筑

園

行哉

日傘

掛書

簾

仲姁人

解於いゝに持る哉 行ぬふい  
 行ぬふい小松よりけく 仲姁人  
 我白ひあしをくく 行哉  
 梅子よりあまかして 日傘  
 障おき表の古き如く 日傘  
 うけ書や公よりあましく 遠い  
 書らぬ人なるく 地獄より  
 窓ならに 昼寝の愛や 簾  
 花うらて 夏冷きとや 大野の  
 空のあましく 志は 竹ゆ人

千那

嵐亭

風和

方堅

嘯月

卯七

来道

色蕉

先放

希因

夏四十一

抱簾

筆枕

涼

抱いこく涼 涼くく 仲姁人  
 抱簾や夏も涼 山行  
 抱かこや 夏も涼 山行  
 月影のあけ 涼く 筆枕  
 すくさや 夏もぬけ 筆枕  
 涼く 夏もぬけ 八日新  
 入敷のちくや 涼く 仲の中  
 涼く 夏もぬけ 仲の中  
 すく 夏もぬけ 仲の中  
 涼く 夏もぬけ 仲の中

其角

其角

乙由

去来

涼菴

其角

其角

其角

其角

其角

其角

すーはち様うゝ是成あつ下ゝ  
 涼き如埃は清々ふ休の枝  
 寺ーまわ風山船の帆あし  
 帷子の清中ゆくゝ風きー  
 涼き成あつ名きこら水車  
 すーはち様うゝはの書  
 撥かけの中涼き階子ど  
 涼風冬日出交時名んうれ  
 すーま如等にいりう均の糸  
 寺ーはち様へおる日の影あ

文考 卯七 正美 信門 木周 一育 洒寺 寺子 操夏 擗良

夏四十二

風薫

納涼

涼き如夏あつさせんえおん  
 素枚成巻てわ風のうぬる書  
 出彼わ風のうぬれお梳子  
 凡かあしうー甲の下巻る書  
 松陰より入山あり涼きど  
 寺ーまわ風山船の帆あし  
 破風のよ日影わさう夕涼  
 夕涼あつと男にせしり  
 秘をせおくうな一夏涼き  
 夜きみわ白ひの香冬月さ

秋瓜 芭蕉 徹士 地坡 来山 芭蕉 松涛 去芳 里圃

赤水

つ立ちく帆よある社や涼と舟  
常しん中哉出ゆく涼と舟  
唇に曇つく穴のすくえ乳  
中乃れ堀をえて羽のりる  
夕涼しゆあふひひ川見野  
果てて是命もつつけり  
日枝下りけり暮る夜や涼床  
今捨と休にありあふり源  
松の葉ももも暮るふと  
水赤や細と花も濡るゆと

文子  
遊刀  
千那  
木導  
乙由  
老士  
彦元  
柳若  
矢代  
左角

清水

赤水や故のありて秋の限  
昔小車流ぬく運水清水  
きれ梅は遠とよ清水  
ま川るの昔さあし清水  
了柄枝と雲より運水  
高念佛中も清水  
引立くも清水  
雲影の白ひ清水  
松の毛に雲のか清水  
小川もあふ清水

巴風  
荷兮  
芭蕉  
猿雛  
神徑  
井扇  
際月  
相之  
一道  
尚白

舊酒のはりしけり清水は  
 連あきく傳せくむま清水は  
 妙なるまき入るる清水は  
 桶あきく置く留るる清水は  
 証あきく六部あきく清水は  
 けり井やや庭うらまへ人のあ  
 けり井やや置かきあきく  
 妙なるまき入るる清水は  
 清濁の水汲よきく清水は  
 頃礼のまき木のけりや心太

徐魚 文深 芳斗 心琴 桐雨 葉府 一招 芭蕉 其角

さし井

麻地酒

心太

長田十四

四神子約の澄上や心太  
 雲の系就すては海も心太  
 ぬるる杉桶の枝も心太  
 志さうも水にも角や心太  
 玉川も心太も心太  
 すしけり葛の色も心太  
 葛水やまの心太  
 切麦や味も心太  
 冷麦や味も心太  
 ひわ汁や味も心太

秋之坊 園家 彦元 信徳 巴静 系解 支考 其十

葛水

切麦

冷汁

水飯	水飯や粉公と乳飯のころん	百尾
于飯	于飯や花きやく朝のつま	粉
菱切糸	菱切糸壺のころやま花玉	重頼
香露散	山水の信ちるきく香露散	舟休
深取	木のまかろ光る眼やうーか	芳菊
子桃	楊梅や千神仲女名にる梅	哉棠
楊梅	前りのお花障りるあま李う乳	珠香
李	ふく取も林檎あ軸て西ふし	玄角
林檎	笑し乳頬り食つく林檎小	太音

百尾	又してふふ日お老かろ光れ	温故
毛筆	ちんせも笑くくく百尾お	千代
	ふ日おふふふふはあけは	未
	なそくこのをかくさる英いさ	麦守
瞿麦	梅子と川糸に足のおけつと	惟花
	ふ井や梅梅とて乃の家のお	参黄
	梅子や思も思も花のおあ	許六
	は介しや蓬よらんねみろん	希因
蓬	嘆の目哉とゆもとや蓬の志	洲春
		乙州

包ちぬく氷のひる蓮の乳  
佛身起く公重さる蓮の乳  
蓮の心折しつゝ乳の心折  
もあけや後かち蓮の心  
白哉流の粉乳にちる蓮の乳  
あつ中へまき中乳く蓮の心  
極糸の曇りゆく蓮の心  
蓮の心たるぬふへ蓮の心  
起く入り入る乳の蓮の花  
蓮花やけき也乳の心ひる

形坡 秋池 支考 折瓦 後吾 以之 杜亮 極若 可成 象栗

夏四十六

浮写

何骨

羨の花

専菜

ち如蓮や糸の骨とぬれ乳  
浮写と田子の枝り引きり  
何骨や馬糸ちる熱水の心  
何骨や法もりて流るぬれ乳  
何骨の一輪つゝ乳すゝも  
羨咲く熱喉後乳ちる入乳が  
鳴の果枝抱く涙や羨の心  
引かしたぬの産ちる乳専が  
専菜やぬれ乳と水の味  
病ちるぬれ乳の心ぬれ乳

如行 素手 伊勢 随友 大和 一高 乙女 蓮中 尚心 正考 骨北



海老

ふしあきや貝取出又と養はる

養はる 貝

蘭の花

水産より取らる海老のそと乳が

乳が 蘭

藍川

藍かりや藻の双き乳と海苔色

海苔 藍

鉄線石

子川の産をこちあ乳鉄線石

乙由 鉄

山伏子徳花や垣り鉄線花

聖元 花

眼皮

釣鐘草

花との釣鐘草の高れきと

漆花 哉人

釣鐘草後よけらる名あはし

希肉 哉人

凌霄花

のもんや拙とてあてきと

希肉

養平七

蒲の種

蒲の種やあ帯かすら刺のふ

舎飛 可空

蒲草ふや子夫の抜て拙とる

伊勢 素道

鷲草

鷲草や中かす一羽立ちり

素道

虎の尾

虎の尾をかぬかりけ白ひり

希肉

風葉

風葉の鳥也玉葉のそと乳も

任使 文雅

風葉虎下に置れぬ白ひり

乙兒

きけりや紫水柱一級の高

臥高

擬宝珠や系我後さけらる耐

三五

日さからの名や涼しむきれ下

香舟

雲の下

日さからの名や涼しむきれ下

香舟

射干

紫菀

青兔肝

赤子

麻

小豆

除也してきりれはるやまの  
いあめれや御陵一いころ  
柱麻糸かくれ縫子のかき  
花やちや実やら麻くは  
兔肝や青いもころ喜い  
赤子や夕日にちた水か衣  
あけふら麻糸直に二の  
ふしのききかきくさく  
麻かりて風すれ雨る小豆  
たはてあ糸に糸の糸きけ

初鬼 風子 希周 吾仲 出房 重厚 配刀 強通 斜旗 龜羽

長四十八

射の花

去染瓜

射の花はましくも糸は似ころ  
弓の射のまき替くや射の花  
雪いもやらう出も射も  
初去染瓜はましく物に  
我は似れ二のましく去染瓜  
水かきかきかきかきかき  
瓜の皮水もかきかきかき  
さ川瓜や東(馬)を城一か  
むくも黒の粒はくも糸は  
瓜むくも男(馬)を城一か

素巻 巴水 周雨 芭蕉 游刀 其角 支考 猿餅 立吟

南風  
夕顔

九つ巻のつらき花の影をてふ三葉  
三葉をくくるとは涼しき事ぞ  
南風のふりにひつむや芽の影  
ゆふのや影の影をまことの元  
持ぬのや影をまことの影の影  
夕顔のつらき花の影をてふ  
夕顔の影をてふとて影の影  
夕顔の影をてふとて影の影  
夕顔の影をてふとて影の影  
夕顔の影をてふとて影の影

巴静  
蝶度  
遊水  
芭蕉  
夕顔  
一笑  
持花  
去来  
許六  
三惟

巻四十九

夕顔のつらき花の影をてふ  
ゆふのや影の影をまことの元  
持ぬのや影をまことの影の影  
夕顔のつらき花の影をてふ  
夕顔の影をてふとて影の影  
夕顔の影をてふとて影の影  
夕顔の影をてふとて影の影  
夕顔の影をてふとて影の影  
夕顔の影をてふとて影の影  
夕顔の影をてふとて影の影

柳水  
尚白  
当吟  
乙由  
、  
紙書  
可風  
百朋  
智春  
松吾

昼歌

昼歌やあふた長足のぬ  
 昼歌や一夏山伏の巻つゝぬ  
 ひる夜の忌やなみのかみ時分  
 穀子花や船のつづく砂の上  
 昼歌や牛のこぼれまゝ遠うま  
 昼歌や地づのあもるふか  
 ひる歌やのせきくまきまの上  
 ひる夜の西つよきまに昼歌は  
 昼歌や扇の陰はくはくみ  
 昼歌や舞のゆはけしきま

智月  
 支考  
 郷立  
 治毛  
 不有  
 世有  
 玄武  
 千代  
 元筑  
 冬季

長尺十

掃の花

秋雲花

雲雀鶯

蟬

ひる夜のいさぎもよさの鬼も  
 昼歌や嘆きくとまき通ら  
 お中やいさそのふよきせん  
 晴夜のうらみで流す雨雲雀  
 杖子フリル哉入るやひらりた  
 やそ死ぬけけり又も掃花  
 秋歌やまきにまけ好ゆき  
 懐うは木ぞむねや蟬のこゑ  
 春のこゑも涼まぬや異ふよ  
 定解とあるまじき仕事か

法九  
 古牛  
 乙由  
 陽和  
 治毛  
 芭蕉  
 嵐雪  
 支考  
 乙由

室輝

花のいふ御書深しわ枝の輝  
輝けりも探るあけぬえ板  
蟬のあきふ冬重森の仕込り  
りろろつとむやうく蟬のさ  
んゆらと一日鳴やをこい急  
いぬは流あもかき川蟬の声  
揺る木もきし勅え蟬乃如  
我ひはら暑いやうくせしはあ  
あにらぬは志すふてわ蟬のか  
目の玉も取く出らる蟬のう

北枝  
高川  
支考  
陰風  
小春  
木欠  
可風  
文秀  
玄芳  
山高

夏虫

蟻

夏虫も大哉取よまをたると死  
すれまの勢よまはらぬ夏の虫  
いふもてとまをたれも大哉ま  
すねたんとまあうくく夏の野  
蟻あきくはまを採らるはまら  
まの中へ蟻よまをた牛の首  
蓋まは出さし蟻の羽書が  
告しきや益系ゆけり牛の蟻  
牛も我勅え蟻のちううが  
頬と獲るまをた蟻のつぎが

我峯  
昌房  
地取  
園更  
午那  
等水  
牧考  
九考  
老士  
葉考

又云

納

毛虫

年龜虫

川將

始りけり夏多誠元雲の泣  
系法もあきけりの乃川事  
いにき凡ゆるの細道小雨降  
英しれ取れりあさう毛虫が  
踏付くおぼえひく毛虫が  
多起り八巻を巻きわたりて虫  
川うらや葉か敷けり泣も有  
川かろや背こころく月味く  
川物如一日習ふ小巻の業  
川うらや伊勢武吉ひら赤禪

之角

廿七

秋屋

瓦意

过風

秋

杜若

巴静

巴弓

精治

海月取

仲籠

夏瘦

秋近

川かろや上下の志しぬを祿  
精治や法政我出て丹世帯  
精つらや不知火あしぬ彼の上  
精哉押も眠こそく海月取  
漢有る人若の糸也法政急  
仲籠まきしや死も壺加城  
夏瘦や尺女らにのき吃る事  
や川や智や焼きく泳めりり  
焼ちり死公のさうわや多事  
秋子し英こそかりし詠の後

毛仏 立和

曹北

吹夏

西路

言水

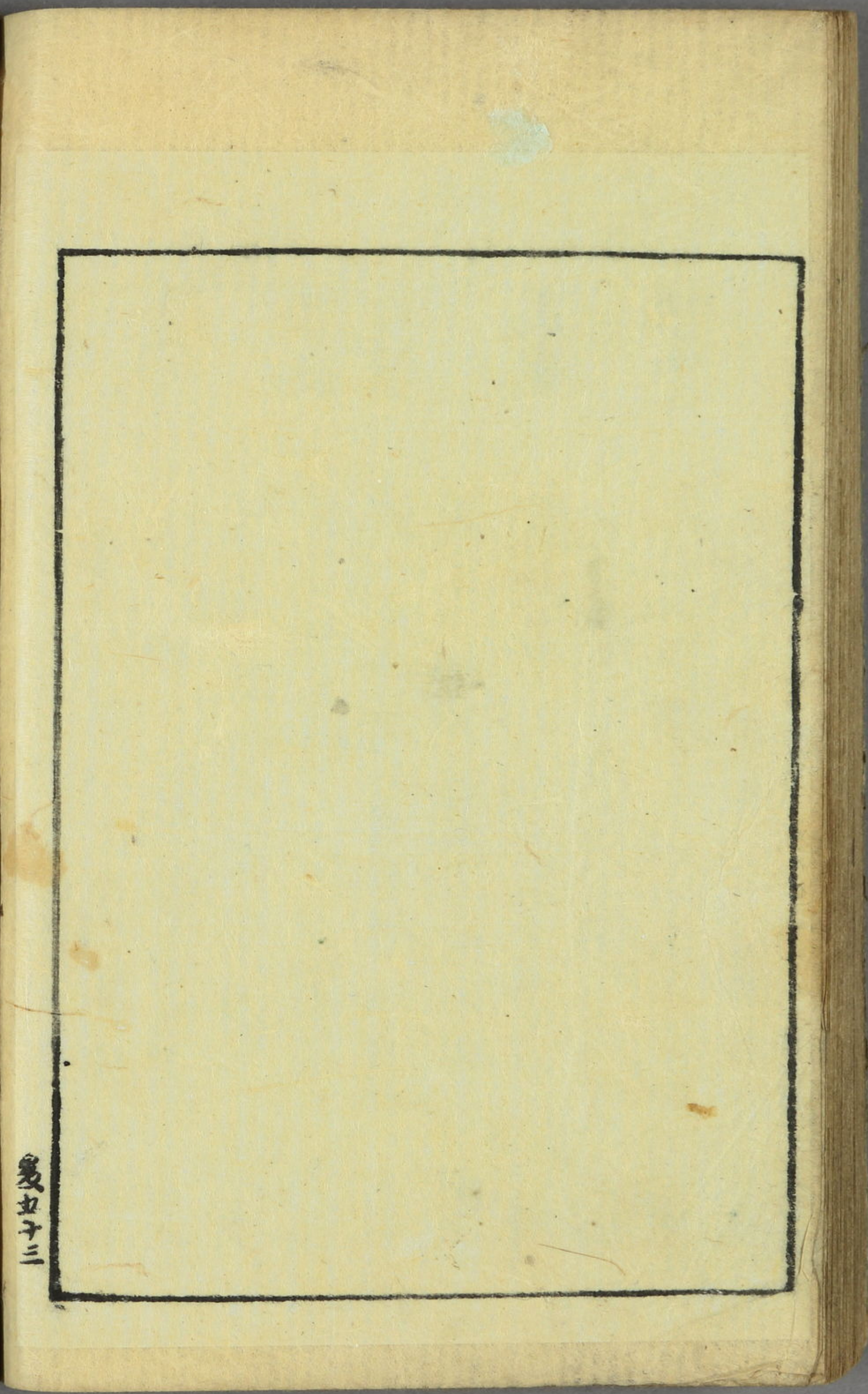
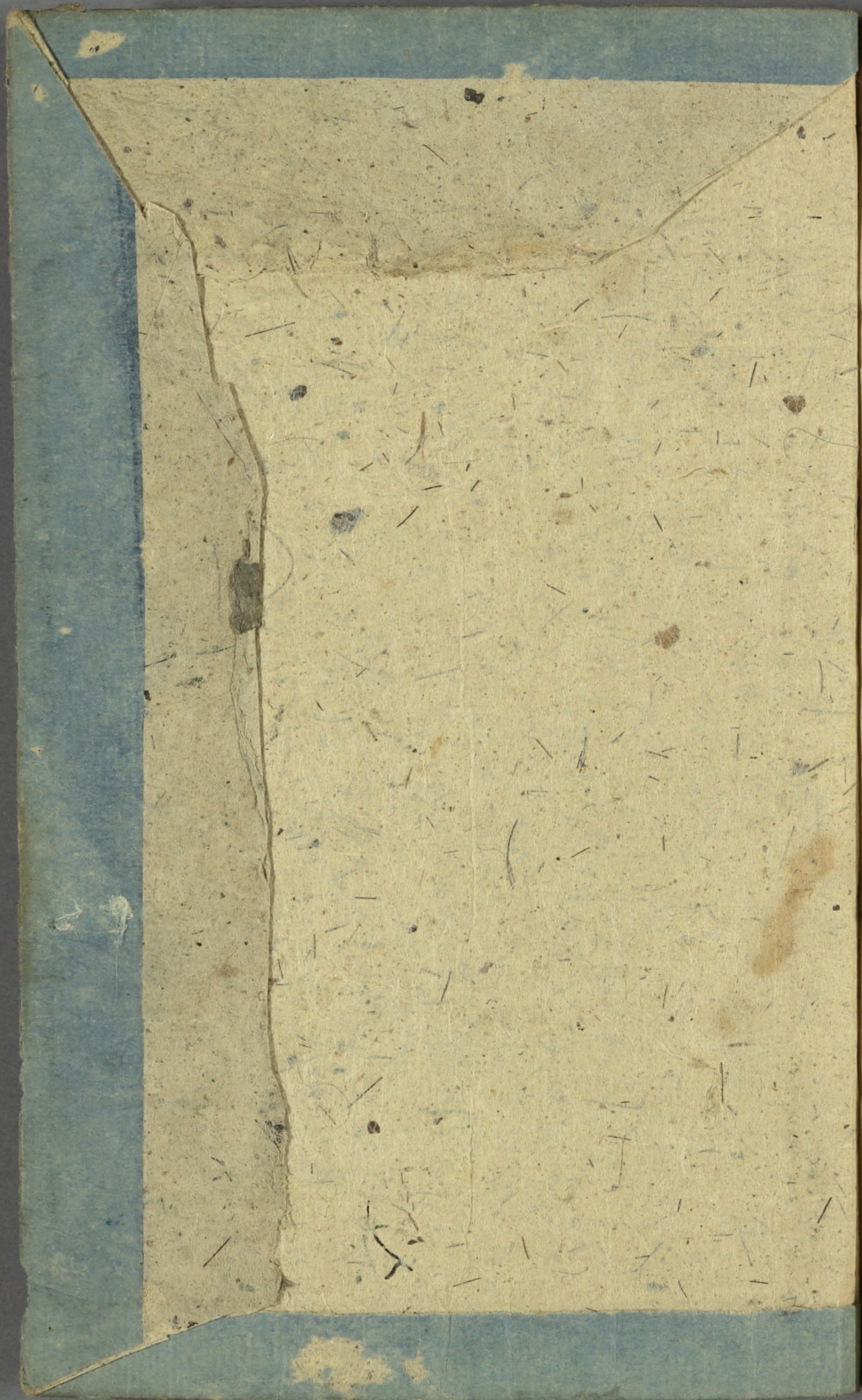
権五

友静

瓦意

芭蕉

真考



卷五十三

